

これからの時代に求められる高等学校のキャリア教育 - 高校生の「生き方」を支えるために -

Career education at high schools that will be required in the future
- To support high school students' "Way of living their lives"-

川合 宏之¹

¹流通科学大学商学部

Hiroyuki Kawai¹

¹Faculty of Commerce, University of Marketing and Distribution Sciences

3-1 Gakuen-Nishimachi, Nishi-ku, Kobe, Hyogo, Japan 651-2188

キーワード：キャリア教育，進路指導，職業指導，生き方

Key words : Career education, Career guidance, Career counselling, Way of living their lives

抄録

我が国の教育は日進月歩である。情報が氾濫し、IT化が推進され、一昔前と比較してより多様な進路が子供たちに開かれるようになった。進路と言っても進学のみならず就職も含んでおり、将来に悩む子供たちにとって大きな支えとなるであろう進路指導が望まれている。特に、独立や自立の欲求が高まり、社会と関わる機会が格段に増える高校生という時期は、成人も近づき、今後進む道について模索する者も多い。そのため、教職員に求められる役割はより重要となってきたとされており、生徒たちの「生き方」を見据えた指導をすることが求められている。進路指導の変遷と職業指導との関連性、さらにこれからの時代求められるキャリア教育に関して述べていきたい。

1. はじめに

高校生という多感な時期の生徒と切っても切り離せないものが進路指導である。現代の職業選択の幅の増加、大学の増加から、進路に関する教師側の指導も重要なものとなってくるため、進路を選択する生徒側だけではなく、指導自体に悩む教師が多いのも事実である。教師が生きてきた時代と現代の社会情勢は大きく異なるため、自身の経験も当てにならないケースも多いだろう。現代を生き抜く子供たちに沿った指導をすることが求められるのである。では、そもそも、進路指導とはいったいどのようなものであるだろうか。

わが国の歴史を少しさかのぼると、戦後の高度経済成長期において、大企業を中心として終身雇用制が定着し、その流れと表裏一体となって学歴・学校歴が偏重される傾向が長く続いた。このような中で、中学校や高等学校では卒業直後の進学・就職のみに焦点を絞り、入学試験・就職試験に合格させるための支援や指導に終始する実践が見られた。特に高等

学校普通科のうち一般に「進学校」と呼ばれる学校では、社会的評価の高い大学への合格を目指す指導が顕著となり、このようないわゆる「出口指導」をもって進路指導と呼ぶ傾向も強まったと言える^[1]。

無論、進路指導の本来の姿はこのような受験偏重の指導とは全く異なる^[2]。生徒が将来進む道を見つける手伝いをし、送り届ける流れ全体が進路指導全体に内包されているため、進学以外の選択肢である、就職やその他の道へ進むことに関しても重要な指導となることをしっかりと踏まえておきたい。

2. 進路指導

2.1. 高校生という時期の重要性

前述したように、高校生という時期は、自分の将来における「生き方」や進路を模索し、大人の社会でどう生きていくかという課題に出会う年代である。様々な人々の「生き方」に触れ、人間がいかに在るべきか、いかに生きるべきか考え、その中で、自分

の人生をどう生きていくかという自己実現の欲求も高まってくる。生きることの意味は何かといった人間としての「在り方・生き方」を理念的に考える一方で、就職や進学を控え、現実的な検討・対応や具体的な選択・決定が求められる。特にこの大人と子供の狭間で揺れ動く時期は、自分の将来を具体的に設計しその実現に積極的に取り組む生徒がいる一方、理想を求めることに急で、とかく現実を否定する傾向も強まるため、不透明な未来にこの時期特有の様々な不安や悩みを抱え、中には、無気力傾向に陥ったり、非行に走ったりする生徒も見られる。生徒は、豊かな経験や十分な情報を得ていることは少なく、自分の将来を広い視野から考えられず、自分自身で適切に進路の課題を対処できないことが少なくない^[3]。そのため、適切な進路指導がより一層求められる時期とも言えるのである。ある地域では、地元や企業の人たちとの交流を通して、生徒の社会性を育成するとともに規範意識の向上を図ったり、社会体験活動を通して、その後の高校生活に目標を持たせ、自主的に活動できる生徒の育成を目指すといった取り組みが行われている^[4]。

確かに、卒業直後の進学・就職が、将来の社会生活・職業生活に少なからぬ影響を与えることは事実である。それゆえ近代の「指導」の実践の多くは、入学試験・就職試験に合格させることに力点を置き、その一方で、生徒一人一人が自ら主体的に将来を切りひらき社会参画するための力の育成については不十分な点を残していた。しかし、自らの長期的な将来展望との関連を十分検討しないまま、進学したり、就職したりすることが、その後の無気力や不適応を引き起こす要因となり得ることもまた事実であろう。本来の進路指導は、卒業時の進路をどう選択するかを含めて、更にはどう人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立って指導・援助するという意味で「生き方の指導」とも言える教育活動なのである^[5]。そのような教育を「キャリア教育」と呼ぶことが多いが、こちらに関しては後述したい。

2.2.進路指導と職業指導

以上のように、高校生にとって進路指導とは大きな意味を成しており、ある意味「ライフイベント」とも言えるものである。しかし、現在の教育現場において、進路指導を「非常に難しい」と感じている職員の割合は約4割にのぼり、この数字は2006年以

降から増加傾向という厳しい現状があるのも事実である^[6]。時代の変遷と共に求められる進路指導も変化しているため、教育者もそれらに対応しなければならない。このような現状がうかがえる数字であると言え、こちらに関しては後述したい。

従来より、日本では高校の先生が在校生の就職の面倒をみたり、学校が進路指導の一環として職業斡旋を行ってきたことが広く知られている。日本の高卒者の就職は、卒業以前に求職活動が行われ、在学中に就職先が内定し、卒業後に間断なく直ちに職業の世界へと入っていくという特色がある。しかし、このような就職の過程は、他の産業諸国とは大きく異なっている。日本では、新規学卒者に関しては一般の求人とは区別された新規学卒求人が設けられており、公共職業安定機関と学校が連携して、高校在学中の生徒たちに対して就職指導・斡旋を行ってきた^[7]。従って、進路の中には卒業すぐに就職する選択肢は生徒の中で多くを占め、これらを踏まえて進路選択を行うことが出来た。しかし、前述したように学校が深く関与した就職指導・斡旋の仕組みは、1990年代以降大きな変化に直面している。それは、このような仕組みを通過する高卒就職者が激減しているという事実である。1990年代の大学・短大の進学率上昇に伴い、高校を卒業してすぐ正規雇用者として労働市場にはいって行く若年者の割合は、激減していく一方であったのである^[8]。このような経緯もあり、進路指導は現在においては大学・短大等への進学と捉えられてしまうことが多い現実が浮き彫りになっている。

そもそも進路指導とは、「生徒の一人一人が自分の将来の「生き方」への関心を深め、自分の能力適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広めかつ深め、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくのに必要な、生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の組織的・継続的な指導・援助の過助の過程」^[9]であると定義されている。つまり、進路指導には就職指導だけでなく、進路指導も含まれること、さらに進学指導はマッチングだけでなく、生徒の個性を伸ばすガイダンスとして行われるべきことが示された^[10]。生徒の幅広い可能性に言及しているこの定義は、はるか昔の昭和50年代に生まれたものである^[11]。社会的関心を集めた、人間を自己実現に向かって絶えず成長する存在として捉えた諸理論、いわゆる自己実現理論の強い影響の下で作成されたことがうかがえる。

このような背景に立ちながらも、生徒の成長や発達を強く意識し、卒業後の社会生活・職業生活での更なる成長を願い、そのために必要な能力や態度の育成を進路指導の中心的な役割として定義を解釈したことは特筆すべきであることと言えよう。

このように、進路指導は、昭和30年代前半まで「職業指導」と呼ばれていたが、戦後一貫して、中学校・高等学校卒業後の将来を展望し、自らの人生を切りひらく力を育てることを目指す教育活動として、中学校及び高等学校の教育課程に位置付けられてきた経緯がある^[12]。

高校生という時期は、大人の社会でどう生きていくかという課題に遭遇する時期であり、自分の人生をどう生きるか、自分の存在価値とは何かといった、人間としての「在り方・生き方」を考えながら、自分の進路実現に向けての選択・決定を迫られる。具体的に、進路の選択・決定を行う生徒もいれば、自分の現実に目を向けず理想ばかり追い求め、自己が肥大してしまう生徒もおり、様々な不安や悩みを抱えやすい。特に、就職を希望する普通科の生徒は、他学科に比べ厳しい就職状況に直面することが多いにもかかわらず、この時期においても進路意識や目的意識が不明確な生徒も少なくないので、インターンシップ等の体験的な学習を通して、自分のキャリア形成に必要なより実践的な知識の習得や、より明確な自分の適性理解、将来設計、勤労観・職業観の形成・確立を図る必要がある。また、この過程を通して、生徒は自己及び自分の置かれている現実としっかり向き合いつつ、自分の将来を見据えることで、課題に立ち向かい解決していく能力、つまり社会で生きていく力を身に付けていくのであり、それが生徒の自己実現につながっていくのである^[13]。

2.3. 高校生の進路指導

前述したような歴史がある中で、高校生の進路指導に関しては現在どのような状態になっているのであろうか。前節で触れたように、現在の生徒の進路指導を難しいと感じているかという質問に、進路指導主事を中心とする回答者の35%が「非常に難しい」と回答している。「やや難しい」の57%と合わせると9割以上が進路指導を難しいと感じている。過去調査と比べると、「非常に難しい」は以前よりも減少しているが、難しいと合わせた割合は依然9割以上と高どまりの傾向にあるという^[14]。未来ある若者の選択肢を共に考え、導く現場の苦労がうかがえる結果で

あると言えよう。教職員が過ごした子供時代と現代では、多くの点が異なり、より多様な選択肢が広がっている。今を生きるものであっても、年代も感性も異なるため、理解した指導を行うことは容易なことではない。

大学・短大の進学率別にみると、進学率が低い高校ほど「非常に難しい」と感じる割合が多いことが分かっている。以前に比べ、「非常に難しい」と感じる割合が増加したのは大学・短大の進学率が40~70%未満の学校のみであった。ちなみに設置者別にみると、「非常に難しい」と感じる割合は、私立よりも国公立、高校タイプ別では普通科よりも総合学科や専門高校で高くなっている。進路指導を困難と現場の教師陣が嘆く主な理由として、トップは生徒の「進路選択・決定能力の不足」である^[15]。これは2008年以降不動のものとして変わらない。情報が氾濫し、選択肢が増え、職業の幅が広がるというメリットが増えた一方で、かえって自己決定をすることが困難になっている生徒も多いのかもしれない。その他の理由としては、保護者の「家庭・家族環境の悪化」、学校の「教員の進路指導に関する時間不足」、生徒の「学習意欲の低下」、「勤労観・職業観の未発達」と続いている。特に年々増加している原因としては、生徒の「勤労観・職業観の未発達」、保護者の「子どもに対する過剰な期待」が挙げられる^[16]。

時代の移り変わり、教育環境の変化により、進路指導において気を付けなければいけない事柄は日に日に移り変わっていく。大多数の高校生は、社会人に比べて活動範囲が狭く、社会的・職業的な経験も乏しいことを踏まえ、将来の選択肢に関する幅広い情報の収集・選択や、インターンシップなどの体験的な学びなどの機会を積極的に設定することが求められている。このような働きかけが、生徒の多面的な成長を促す上で極めて重要であると言えよう^[17]。情報が多様化している現代社会であるからこそ、生徒も教師も多くの物事に翻弄され、目標とすることを見据えることが厳しい場合もある。このような21世紀だからこそ、求められる進路指導が存在すると考える。

3. 高校生とキャリア教育

3.1. キャリア教育とその重要性

「進路指導・職業指導」には前述したような歴史があり、様々な課題がある。その一方で、現代では一人一人が「生きる力」を身に付け、明確な

目的意識を持って日々の学校生活に取り組みながら、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力を高め、勤労観・職業観を形成し、激しい社会の変化の中で将来直面する様々な課題に対応することが強く求められている。そのため、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育の推進が強く求められている。

児美川孝一郎（2007・2010）によれば、現在のキャリア教育の在り方を大きく方向づけることになったのは、次の3つの政策である。1つは1999年の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、2つ目は、2003年の文部科学・厚生労働・経済産業・経済財政政策の各大臣による若者自立・挑戦戦略会議「若者自立・挑戦プラン」の発表。そして3つ目が、翌2004年の文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」の最終報告である^{[18][19]}。

そもそもキャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。そして、キャリア教育のキャリアとは何を指すのであろうか。人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである^[20]。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである^[21]。教育の一環として、このような人生の礎とも言えることを教える教師の務めは重大なものであると言えよう。現代を生き抜いていく子供たちのために、道を指示していく必要があるのである。

また、今日、「進路指導」は、社会的にも広く通用する教育用語の一つと言える。誰しもが、自ら

の中学時代・高校時代の体験をもとに、身近な言葉として認識している。しかし、それゆえ、本来の理念とは反する理解も根を下ろしてしまっているようである。理念からかけ離れた「進路指導」、いわゆる出口指導ともいわれるものと、キャリア教育との混同はぜひとも回避しなくてはならない。中学校・高等学校の関係者はもちろん、就学前教育や初等教育、継続教育や高等教育の関係者のみならず、社会一般に広く用いられる言葉としての定着を期待されて「キャリア教育」は登場した。キャリア教育という用語の普及・浸透と同時に、理念とかけ離れた理解の蔓延をいかに防ぐかが問われている。そのためにも、各学校において、キャリア教育の正しい理解に基づく活発な実践が今後より一層期待されるのである^[22]。

中央教育審議会は、キャリア教育を行う意義に関して三点述べており、順に説明したい。まず第一に、キャリア教育は、一人一人のキャリアの発達や個人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。各学校が、この視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員に教育の理念と進むべき方向が共有されると共に、教育課程の改善が促進されるのである。第二に、キャリア教育は、将来、社会人・職業人として自立していくために発達させるべき能力や態度があるという前提に立って、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が目指す全人的成長・発達を促すことができる。第三に、キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、生徒等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。このような取り組みを進めることを通じて、学校教育が抱える様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる^[23]。ただ漠然とキャリア教育に取り組むのではなく、意義を理解して行うことが、教職員には求められる。

3.2.職業教育とキャリア教育

前節で整理した通り、キャリア教育は普通教育、専門教育を問わず様々な教育活動の中で実施され、当然のことながら、そこには職業教育も含まれる。

職業教育は、キャリア教育の中核的な役割である社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育成する上でも極めて有効な機会である。例えば、商業における「ビジネスマナーとコミュニケーション」は、人間関係形成・社会形成能力を高める場としても重要であり、人に直接関わる職業について学ぶ福祉や看護等においても、それぞれの専門性を生かしたコミュニケーション・スキルの向上に寄与する豊かな学習機会がある。また、それぞれの職業に関する専門教科における「課題研究」は、課題対応能力を高めるに留まらず、自らの興味・関心につながる学習の意義を理解させ、自律的な学習態度を育成するという点において自己理解・自己管理能力も向上させるという重要な役割を担っている。さらに、全ての職業に関する専門教科において、それぞれの産業分野におけるスペシャリストとして働くことや、職業人としての将来設計に関わる具体的な能力を高める様々な学習が展開されているが、それは正にキャリアプランニング能力を高めることに大きく貢献すると言える^[24]。

社会が大きく変化する時代においては、特定の専門的な知識・技能の育成と共に、多様な職業に対応し得る、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成が求められている。このような能力や態度は、具体の職業に関する教育、とりわけ体験を通して育成していくことが極めて有効である。平成21年3月に改訂された高等学校学習指導要領は、「職業教育に関して配慮すべき事項」において、「学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする」と定めているが、この規定をこのような観点から捉えて実践することが重要であろう^[25]。

以前は、職業教育とキャリア教育を混同し、職業教育を行えばキャリア教育は特に必要ないという誤った理解も少なくなかった。職業教育に関わる教員がこのような誤解に再び陥ることなく、職業教育をキャリア教育の視点から捉え直すことが必要だろう。その際、職業教育は、専門分野の学習とその後の進路を固定的に捉えるものではなく、特定の専門分野の学習を端緒として、これに隣接

する分野や関連する分野に応用したり、発展したりしていくことができる広がりを持つ教育であるという観点に立って、一人一人のキャリア発達を幅広く促すための意図的・計画的な指導を、職業に関する専門教科の実践を通して行っていくことが求められる^[26]。

3.3. キャリア教育と「生き方」

ここまで進路指導と職業教育、キャリア教育に関して述べてきた。多くの人は、人生の中で職業人として長い時間を過ごすこととなる。職業や働くことについてどのような考えを持つのかに関することや、日常生活の中でそれぞれの役割を果たしつつ、どのような職業に就き、どのような職業生活を送るのかに関することは、人がいかに生きるのか、どのような人生を送るのかということと深く関わっている。この意味で、一人一人が自らの勤労観・職業観の形成・確立を図ることは極めて重要である。そのため、キャリア教育がなす意味は大きい。この点について、中央教育審議会答申は次のように述べている^[27]。

意欲や態度と関連する重要な要素として、価値観がある。価値観は、人生観や社会観、倫理観等、個人の内面にあって価値判断の基準となるものであり、価値を認めて何かをしようと思ひ、それを行動に移す際に意欲や態度として具体化するという関係にある。また、価値観には、「なぜ仕事をするのか」「自分の人生の中で仕事や職業をどのように位置付けるか」など、これまでキャリア教育が育成するものとしてきた勤労観・職業観も含んでいる。子ども・若者に勤労観・職業観が十分に形成されていないことは様々な指摘されており、これらを含む価値観は、学校における道徳をはじめとした豊かな人間性の育成はもちろんのこと、様々な能力等の育成を通じて、個人の中で時間をかけて形成・確立していく必要がある^[28]。

勤労観・職業観は、勤労・職業を媒体とした人生観ともいべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような「生き方」を選択するかの基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。勤労観・職業観の形成を支援していく上で重要なのは、一律に正しいとされる「勤労観・職業観」を教え込むのではなく、生徒一人一人が働く意義や目的を探究して、自分なりの勤労観・職業観を形成・確立し

ていく過程への指導・援助をどのように行うかである。人はそれぞれ自己の置かれた状況を引き受けながら、何に重きを置いて生きていくかという自分の「生き方」と深く関わって「勤労観・職業観」を形成していく。「生き方」が人によって様々であるように、「勤労観・職業観」も人によって様々であって当然である^[29]。

キャリア教育では、「生きる力」を生徒たちに身に付けてもらうことを推進している。平成20年1月の中央教育審議会答申では、「生きる力」という目標を関係者で共有するため重視する視点として、次のような内容が指摘されている。まず、将来の職業や生活を見通して、社会のために自立的に生きるために必要とされる力が「生きる力」であり、進路決定において子どもたちの希望を成就させるだけではない、とされている。自立して世の中を生き、自分自身で道を見つけ、生き抜いていくことが必要とされているのである。そして、変化の激しい社会で自立的に生きるためには、思考力・判断力・表現力等をはぐくみ、知識や技能を活用できる能力を育てる必要がある。最後に、自分に自信をもたせ、将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちの、豊かなコミュニケーション能力や感性・情緒・知的活動の基盤である言語能力などを高める必要がある。これら3点は、すべてキャリア教育の目的とも深い関係があり、キャリア教育を推進することによって、より高められるものである^[30]。多感で自立を迫られ、将来を考える時期である高校生という年代においてこれらの「生きる力」を養うべくキャリア教育を行うことは極めて重要であると言えよう。

3.4. 高校生に求められるキャリア教育の重要性

高等学校においては、生徒の個性や義務教育までに培った能力や態度を更に伸ばさせるとともに、学校から社会・職業への移行の準備として専門性の基礎を育成することが求められ、その目的は「中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すこと」と定められている。この時期は、中学生と比べて更に独立や自律の要求が高まるとともに、所属する集団も増え、集団の規律や社会のルールに従い、互いに協力しながら各自の様々な役割や期待に応じて円滑な人間関係を築いていくことが求められる。また、自我の形成がかなり進み、人

間がいかにあるべきか考えるとともに、自己の将来に夢や希望を抱き、その実現を目指して進んで学習に取り組む意欲を持ち、自己の個性や能力をいかす進路を自らの意志と責任で選択し、決定していくことが求められる。これを踏まえ、高等学校においては、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成と、これらの育成を通じた勤労観・職業観等の価値観の自らの形成・確立を目標として設定することが重要である。そのためにも、学科や卒業後の進路を問わず、社会・職業の現実的理解を深めることや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考える教育活動等に重点を置く必要がある。

高等学校学習指導要領において「第1款の4」及び「第5款の4の(5)」では、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界との連携を図り、就業体験の機会を設け、地域や産業界等の人々からの協力を積極的に得よう求めている。キャリアの形成には、学校を中心とし、家庭や地域の産業界及び関係諸団体との連携・協力を深めることで、より具体的な将来像の形成が期待される。学校以外の地域の方々との関わりは、円滑な人間関係の形成と自己の役割を考える機会となり、自己の将来像を考える上で有効である。高等学校段階においては社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力等を育成する必要がある。高等学校教育への進学希望者に対しても「大学等の向こう側にある社会」を意識させ、それぞれの将来について考えることが求められる^[31]。日ごろの学校生活においては、部活動や授業に追われ、自分の将来のことを十分に考える余裕がないのも現状である。そのため、キャリア教育を通してそのような機会を設けるべきである。

学校以外の外部との関わりは、より具体的に現実的な勤労観・職業観を育成する上で効果的である。そして、こうした子どもたちのキャリア発達にとって意義深い社会との関わりを広げていく取り組みが、さらに実り多きものとなるためにも、これらのプログラムをキャリア教育の全体的な流れの中に位置付け、その事前事後にある活動と関連付ける系統性を高めていくことが、今、求められていると言えよう^[32]。

高校生期においては、「自己理解の深化と自己受容」「選択基準としての勤労観・職業観の確立」「将来設計の立案と社会的移行の準備」「進路の現実の吟味と試行的参加」が特に重要な課題とな

る。キャリア教育の視点からは、特に学科や卒業後の進路を問わず、現実的に社会・職業の理解を深めることや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考える教育活動などを行うため、これらを指導計画に位置付けて実施することが必要である。各高等学校においては、これらを基盤としつつ、生徒や地域の実態に即し、学校や学科の特色やこれまでの取り組みを生かしながら、「基礎的・汎用的能力」に示される4つの能力「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」、それぞれについて具体的な目標を設定していくことが必要である。キャリア教育を「新たな課題」として提示するのではなく、これまでの蓄積を生かすことが重要であり、各取り組みをキャリア教育の視点から捉え直すことで、更なる向上を図る機会とすることができる^[33]。

このように、高校生にとって計画的・系統的なキャリア教育は極めて重要であり、高校生のキャリア発達課題に即した目標設定が求められる。

4. おわりに

高等学校における進路指導、職業指導、さらにキャリア教育の概要と重要性についてこれまで述べてきた。職業や進学の実現の幅が広がり、一人ひとりの個性に合った選択がより重視されるべきである現代において、教職員に求められる役割は大きくなりつつある。大人と子供の狭間で揺れ動き、自立へと進んでいく人間形成の重要な時期である高校生であるが、その際に適切な「進路指導」と「キャリア教育」を行うことで、長い人生を生き抜く力へと繋がっていくのである。勤労観・職業観を育み、世の中の情報を冷静に判断できるような力を養うためにキャリア教育の必要性は今後ますます高まることだろう。

そのために、本論にて触れたこれらの歴史と変遷、現代における役割を理解するとともに、高校生にとっての「生き方」を理解して考えていく必要がある。

引用文献

- [1] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P39-44.
- [2] 前掲[1] P39-44.
- [3] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P129-131.
- [4] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P144-152.
- [5] 前掲[1] P39-44.
- [6] 株式会社リクルート (2011) 「2010年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」報告書.
- [7] 石田浩 (2007年) 「高校が就職斡旋をすること—高校がハローワーク?」『日本労働研究雑誌』第561巻.
- [8] 前掲[7].
- [9] 文部科学省 (1978年) 『進路指導の手引—高校ホームルーム担任編—』, 日本進路指導協会.
- [10] 宮内博編著 (1992年) 『学校進路指導概論』, 文雅堂銀行研究社.
- [11] 前掲[1] P39-44.
- [12] 前掲[1] P39-44.
- [13] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P132-135.
- [14] 前掲[6].
- [15] 前掲[6].
- [16] 前掲[6].
- [17] 前掲[3] P129-131.
- [18] 児美川孝一郎 (2007年) 『権利としてのキャリア教育』, 明石書店.
- [19] 児美川孝一郎 (2010年) 「『若者自立・挑戦プラン』以降の若者支援策の動向と課題—キャリア教育を中心に—」, 『日本労働研究雑誌』第602巻.
- [20] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P9-17.
- [21] 前掲[20] P9-17.
- [22] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P39-44.
- [23] 中央教育審議会 (2011) 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』, 株式会社ぎょうせい.
- [24] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P36-38.
- [25] 前掲[24] P36-38.
- [26] 前掲[24] P36-38.
- [27] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P20-30.
- [28] 前掲[23].
- [29] 前掲[27] P20-30.
- [30] 文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版, P31-35.
- [31] 前掲[4] P144-152.
- [32] 前掲[4] P144-152.
- [33] 前掲[3] P129-131.

Abstract

Our country's education system is making a rapid progress. With information inundating us, and with IT systematizations being driven forward, the future paths that are open to children today are very diverse when compared with how it was some time ago. The future paths not only include academic paths, but career paths as well. This is why providing career guidance for children is desirable because it can be a huge support for those who are worried about their future. High school period is the time when students start having a higher desire to be independent and self-supporting, and since the Coming-of-Age Day is approaching, and that they have more opportunities to get involved in society, there will be many high school students who seek for the right future path during this high school period. This is the reason why the roles that students expect their teachers to take are becoming more crucial than ever before, and that the teachers are expected to guide students while considering the students' "ways of living their lives". I would like to write about the relevance of transitions of the career guidance to the career counselling, as well as the facts about the career education that will be required from now on.

(受付日 : 2019 年 3 月 22 日, 受理日 : 2019 年 4 月 3 日)

川合 宏之 (かわい ひろゆき)

現職 : 流通科学大学商学部経営学科准教授